

第 35 期第 1 回研究会「青年文化としての雑誌メディアのこれまで／これから」（メディア文化研究部
会企画）終わる

日時：2016 年 2 月 22 日（土）17:30～20:00

場所：大阪市立大学梅田サテライト 107 教室

書評者：竹内 洋（関西大学）

竹内 幸絵（同志社大学）

井上 義和（帝京大学）

討論者：『青年と雑誌の黄金時代』（岩波書店、2015 年）執筆者 9 名

司 会：溝尻 真也（目白大学）

参加者：45 名

記録執筆者：石田 あゆう（桃山学院大学）

今回の研究会では、2015 年 11 月に刊行された、佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店）についての合評会を行った。

同書に掲載された 10 編の論文を、教育・思想関連雑誌／情報・流行関連雑誌／趣味・カルチャー雑誌という 3 つのジャンルに大別し、書評者はそれぞれ教育社会学、広告文化論、メディア論という三つの観点からコメントを行った。その後、各論執筆者 9 名と討議がなされた。

まず書評者の一人、竹内洋氏より同書のテーマについての確認があった。各章では個別の雑誌論が展開されているが、と同時に、その読者は青年という「未完成な」存在が中心だったという共通の主題を持つ。その点をふまえ今後の雑誌文化の可能性について、各評者からは以下のコメントがなされた。

まず教育・思想関連雑誌に関し、今日の日本型経営がグローバル化し、即時的価値が求められるようになった社会において、関連雑誌の持つ遅延報酬の機能が意味を持ちにくくなったのではないかと指摘がなされた。そもそも教育という営みは欲望充足延期が前提で、これから社会に出て行く若者（青年期）との関わりにおいて意味をなすものである。教育機能を持つメディアが「時代遅れ」と見なされるような現状に疑問を呈した。

続いて情報・流行関連雑誌について、各誌（女性ファッション誌、映画雑誌、情報誌）に共通して見られる「ビジュアル」への依存、情報網羅性は、今日のメディアに見られる「フラット性」に通じるとの指摘があった。今も昔も時代の少数のトップランナーに、圧倒的多数の若者がメディアを通じてアクセスしようとするのであり、また雑誌を「めくる」という身体性も失われていないと、雑誌が育んできたメディア特性の可能性が論じられた。

最後に趣味・カルチャー関連雑誌については、各誌（音楽雑誌、無線雑誌、ゲーム雑誌）を介して行われるコミュニケーション機能について言及があった。個別の内容に特化されていても、そうした見かけの情報の違いとは裏腹に、雑誌上の交流が視覚化されるという機能に、一定の共通した特徴が見いだせるというわけである。雑誌を介してつながる編集者や記者、そして読者、その中にあるジェンダーを含めた多様な関係性が露わになる点に面白さがあるとの報告があった。

こうした指摘を受けてフロアの執筆者たちからの応答がなされた。時間に制約があり、その他の参加者からの質問等を受けつけられなかったのが残念ではあるものの、本研究会には 45 名もの多数の参加者があり盛況であった。最後に、今日青年の雑誌離れが見られる一方で、フリーペーパーや同人誌作りが盛んになっていることをどう考えたらよいかという、小川博司会員からの問題提起と、雑誌とは定期的に購読する読者を想定して発刊されるメディアであり、やはり未来のある「青年」たちにこそ読まれるべきではないかとの同書編者の佐藤卓己会員のまとめで会は終了した。